

山あいの自然体験を、事業にできるか
3年目のヤマナビキャンプ、得られた手応えと難しさ



山あいの自然は最高のコンテンツ、可能性をどう生かすか

中山間地の強みを、いかに事業に生かしていけるのか―。OKB REPORT のシリーズ「地域を興す」ではここ 2 回（vol.6・vol.7）、こうした問題意識を主題として取り上げてきた。そして、私たち山学が取り組む子ども向け自然体験「ヤマナビキャンプ」にも、その可能性があるのでないだろうかということを検討してきた。

豊かな森林や川、そこに暮らす貴重な生きものは都会にはない、山あいこそが持つ魅力だと言える。子どもたちがそうした魅力に触れ、楽しみ、地域の人や専門家と交流しながら学ぶ機会が、「この場所でしかできない体験」になりうるのではないかという発想だ。

この夏、3 年目となるヤマナビキャンプを開催した。地域の宝を事業に生かす。その実践として取り組んでみると、地域の自然が持つ潜在的な魅力を改めて実感するとともに、継続的な事業としていくための難しさも感じた。

■川へダイブ、みんなの歓声…これぞ夏休み！

「さん、に一、いち……！」

周囲の子どもたちやスタッフの掛け声を合図に、高さ2～3メートルほどの岩場から川へとダイブする。大きな水しぶきと同時に、みんなの歓声が上がる。まもなく水面に浮かんでくる表情は、岩の上では少しこわばっていた子も、“やってやった感”があふれる笑顔に変わっている。

今年のヤマナビキャンプを振り返ったときにまず思い浮かぶのが、思い切り川遊びを楽しむ子どもたちのそんな姿だ。



みんなの掛け声に合わせて川に飛び込む

ヤマナビキャンプで遊び場とする川は木々が覆い、真夏の日中でも直射日光が遮られて驚くほど涼しい。水も冷たい。そんな中で子どもたちは、砂防堤から滝のように流れ落ちる水に打たれたり、天然のウォータースライダーのように流されてみたり、泳いで競争してみたり。どこか懐かしさを覚える、これぞ夏休みと言いたくなるような光景があった。

■自然の魅力を引き出す「人」の力

ヤマナビキャンプは、過疎化が進む本巣市北部の豊かな自然に親しみ、知ってもらおうという狙いで開く1泊2日の自然体験プログラムだ。2024年夏から開催している。2024年、2025年はいずれも7月に1回の開催だったが、今年は初めて7月と8月に1回ずつ開いた。地域の豊かな自然環境の保全を目的とした岐阜県の「清流の国ぎふ地域活動促進事業」の採択をいただき、過去2年の実績も踏まえて活動を充実させるため、回数を増やして開

いた。2回で計35人の小中学生が参加。昨年は親子参加型にして参加者数が伸び悩んだため、今年は子どもだけで参加する形に戻した。

今年2回のキャンプを終えて、感じたことは大きく二つある。

一つは、この地域の自然はやはりコンテンツとして強いということだ。それに加えて、その魅力を伝えてくれる地域の人がいることも大きいと感じた。

1泊2日の中では、川遊びのほか、薪割り、火起こし体験、水生生物調査、昆虫ライトトラップ、キャンプファイヤーといったプログラムを盛り込んだ。

薪割りは地元林業会社の人たちから教わる。危なくないよう足を大きく開き、斧を振り下ろす。薪がスパッと割れる感触にハマリ、何度もチャレンジした子がいた。



林業家の方のサポートで本格的な薪割りに挑戦

火起こしは、ファイヤースターターという器具を使った着火を、地元キャンパーの人らがサポートしてくれた。自分のすぐ手元で火が着くため、最初はおっかなびっくりの子も多いが、自分でできるとうれしそうな表情に変わる。



だんだん恐怖心が解け、火を起こすのもうまくなっていった

生きもの好きな子に人気なのが水生生物調査だ。市内の川の生態系に詳しい先生のガイドのもと、網で川底を探り、水生生物を採集・調査する。捕まえた10種類前後の生物の中には、水質がきれいなところに生息する魚もいて、水環境のよさを実感できた。



網を使って水生生物を探る子どもたち

キャンプ後のアンケートでは、参加した子から「みんなと仲良くできたし、やったことのない体験ができてよかった」との声が寄せられた。保護者からは、「帰ってきた時の顔がす

ごく晴れやかで、大きな成長を感じました」「帰宅後、生物調査で捕まえた生きものの名前や捕まえ方を子どもが話してくれました。遊びながら学びにもつながる経験をさせてもらえて、ありがたく思います」との声もあった。

豊かな自然がある。そして、子どもたちのためにとキャンプに力を貸してくれる地域の人たちがいる。自然環境そのものはもちろんだが、そうした地域の人たちが加わることによって、「ここでしかできない体験」が生まれているように感じた。

■自然の魅力は十分、では壁は？

もう一つ、今年のキャンプを通じて感じたのが、こうした自然体験を継続的な事業として届けていくことの難しさだ。ハード・ソフト両面における運営体制に課題があった。

今年は2回で35人の子が参加した。人数が増えれば、それだけ多くの大人の目と手が必要になる。特に、一歩間違えば命の危険がある川での活動では、スタッフを手厚く配置した。

宿泊を伴うキャンプで必要なのは安全管理だけではない。食事や入浴、着替え、就寝にもどうしても付き添いが必要だ。男の子、女の子の参加者がいるため、男女のスタッフが必ず求められる。今年は大学生や保護者スタッフの方々に力を貸してもらったが、運営の段取りが不十分で迷惑をかけてしまった部分もある。

当日の運営だけでなく、保護者に向けた事前連絡や情報提供についても反省点が残った。特に、保護者に安心して預けてもらえる体制をつくらなければ、そもそも子どもを参加させようという思いにもなってもらえない。

どんなところに宿泊するのか。スタッフによる見守りは十分か。アレルギーに配慮した食事ができるのか。自然の魅力を生かしたアクティビティをアピールするだけでなく、こうしたきめ細かなサポートについても、情報提供や運営体制で改善の余地があったと感じている。

逆に、キャンプ中の様子はSNSや保護者向けLINEを使ってリアルタイムで写真や動画を共有したのだが、これはキャンプ後のアンケートでも非常に好評だった。子どもが何事もなく活動できている様子が離れた場所でもリアルタイムに分かり、安心感につながったのだろう。

■猛暑、クマ…近年の環境変化にも対応が求められる

さらに近年の猛暑も、夏休みのキャンプをより難しくさせている。今年は7月、8月いずれのキャンプでも熱中症警戒アラートが発令された。暑さを考慮して一部予定を変更し、日中は川で過ごす時間を長くする対応をした。

宿泊の環境も厳しさを増している。平野部より早く日が陰る中山間地だが、夜までかなり暑かった。7月はテント泊をしたが、テント内も熱がこもり、快適に眠るには厳しかった。そこで8月のキャンプでは、コテージとキャンピングカーを利用して就寝した。もはや40度近い酷暑が普通という状況を考えると、今後はテント泊そのものを見直す必要もあるかもしれない。

また、クマへの心配も付きまとった。全国的に多発するクマ被害が、山あいでのキャンプ参加に二の足を踏ませた可能性も否定はできない。自然を舞台にするからこそ、主催者が負う責任やリスクは高まっている。

■ハードルが高い「宿泊型」、次の課題は仕組み整備

上記のような反省点や課題がある一方で、繰り返しにはなるが、この山あいで自然体験の場を提供することの意義は大きく、参加の潜在的ニーズも高いと感じている。

9月、キャンプと同じ県事業の一環で、水生生物の採集・調査イベントを開いた。こちらは本巢市内の市街地を流れる糸貫川で、参加無料・半日のプログラムとして提供した。定員20人に対し、すぐに子どもだけで30人を超える申し込みがあり、参加をお断りせざるを得ない方もいた。当日はキャンプと同じ専門家の方に講師を務めてもらい、みんなで30種類以上の水生生物を捕まえて観察ができた。



糸貫川で水生生物採集をする参加者親子



採集した魚を種類ごとに水槽に分け、観察した

無料・半日のイベントと、子どもだけでの一泊二日のキャンプとは単純には比べられない。それでも、自然や生きものに触れたいという子どもたちの関心そのものは高いと感じた。

そう考えると、ヤマナビキャンプの課題は、宿泊型プログラムとして安心して参加させられる環境を整備できるかにある。

3年目のキャンプを終え、この地の自然環境が子どもたちにとって魅力的だということは間違いないと実感できた。だが、魅力の詰まったアクティビティを用意するだけでは持続的な事業にはならない。安心して参加でき、無理なく続けられる仕組みまで整えてこそ、継続的な事業になる。

自然の魅力については、手応えを得られた。次は、その魅力を安心して届け続けられる仕組み整備に力を向けていきたい。